

エゾノギシギシ

小松理英子 北海道

この春はコロナの上に理不尽な戦争のつかり重く過ぎゆく
めちやめちやにこはした町を得たとしてなにかいいことあるのだらうか
カワラヒワ、セグロセキレイ、スズメ来て野原はどこもエゾノギシギシ
「がんばれ」にかはる言葉がみつからず手をふり笑顔でわかれてしまふ
空青く白もくれんの花が咲きそこにその木があつたと気づく

あぢさゐ

佐々木鏡子 秋田

せんめつの（殲）を辞典にたしかめつプライムニュースで知りたる言葉
ナチズムもネオナチズムも知らずして「アンネの日記」読みし少女期
うるはしき五月の宵に届きたり卯の花いろのあぢさゐのはち
貝がらに糸を通ししペンダントもらひたりけりとほき母の日
ラッピング解きしあぢさゐぐいぐいと一気飲みのごと水を吸ひ込む

春愁

豊島秀範 千葉

うすれたる妻の湯飲みのわかば色もろ手につつみ遺影にわたす
聞こえくるうぐひすの声深みゆくケヤキ若葉のみどりをまとひ
よそほへる鎧年へて薄れるや身のうちふかくひそむ春愁
訪ひゆきし淋しきなごり消したくてスタッドレスのタイヤをはづす
溶かし飲む大麦若葉いまごろは大雪山たいせつおろしに新芽ゆれるむ

傘

齋藤美衣 神奈川

浴槽のかたちに四肢を折り曲げてひととき眠るぬるき湯のなか
かつてみな選ばれし日のあつたこと道玄坂を行き交ふ傘よ
かうばしいにほひ残して甲虫は音なくわれを飛び越えてゆく
手帳にはきのふのわれが書き込みし青き文字あり 黒き文字足す
蕎麦のつゆ二番ホームに濃く匂ふ始発電車がまだ来ぬ時刻

雨のやさしさ

小鳥 なの お*東京

菓子パンの袋握ったまま歩く両性具有の雨のやさしさ
友だちはこんなにも私ではなくて慰められて水車のからだ
眠るねと言ってあなたは眠ってるポピーみたいな私の悲観
生き埋めにした感情の古墳群五月のあおい月が見えるよ
感情のカーブの向こうから犬が、どんな季節もふさわしい犬

献杯

四野宮 和之 東京

へー○○分de名著を観てもギブアップしてます「ニコマコス倫理学」
雄の鶴ひと声鳴けばさもありません雌はふたこゑ返すと聞けり
暑き日はすぐにマスクをはづしをり狭くもひとりなる上り坂
きつちりと巻かれてけさも手間取つてゐますキャベツがうまく剥がれず
「乾杯」の一度もなくこの二年二度あり身内のみの「献杯」

やつば葱ぬた

榛葉貞代 静岡

誕生日来て五月憂し籠りつつ息ふかく吸ひふかく吐きたり
梨の花の歌を仕上げて封を閉づ早月の風をすこしだけ入れ
うすもののブラウスはおるマネキンのふくらむ胸に春が来てゐる
盛り皿は素焼ときめて買ひ求む体まると透くホタルイカ
ホタルイカ多目に入れて酔を効かす五月の酒にはやつば葱ぬた

虫より妻

康 哲 虎* 兵庫

手伝ってもらえませんか微笑んでくれる先輩なら言えたのに
しかめっ面クラブをやめて機嫌よく過ごそう会に入ると決めた
居眠りをしてる間に心臓が僕を見放す日もあるだろう
ガスコンロを夜毎キレイに磨きます虫より妻に居てほしいから
店員に必ず来ますと約束し家まで走る財布はどこだ

杖に乗り

中西正博 兵庫

九十歳以上は二百六万人その一人なる一年生われは
われもまた老人大國を押し上ぐるひとりと思へばこころふくざつ
楽だよとかねて聞きゐし杖を持つけふの散歩は初心者マーク
青空のふかきゆふべは杖に乗りすこし呆けて空をゆかむか
五月の雨に濡れて立ちゐる花菖蒲ウクライナ苦しみなほも戦ふ

ヨメノサラ

鈴木 千登世 山口

ボベの汁吸ひたしといふ歌読めり
眠れば長門は海青き郷
嫁の皿と呼びたる祖母のこゑ遠し
ボベは小さき小さき貝なり
搔き取ればほろり剥がるる片貝の
ヨメノサラなり漢字の冥さ
母の住む漁港の町に若布干す潮の
香濃ゆく匂ふ春の日
海風に揺るる若布の春ひかりかも
めはしらく波止に居並ぶ

用はまだない

栗山 由利 福岡

ひなたばこしてゐる亀を数へたら
十三あたりで二がゐなくなる
なのはなの波の向かうで土筆つむ
人が伸びしてあふぐ青空
足もとの春にみとれてゐるすきに
みどり濃くするいちやうの若葉
さりげなく前髪をふつともちあげ
る五月の風はすこしひかへめ
バス停にさいしよにやつて来たバス
は（極楽寺）行き 用はまだない

芍薬の白

海老原 光子 宮崎

瓶に挿す白芍薬に蟻のゐて花の
迷路をうろうろとせり
芍薬は白の重きに耐へかねてほろ
ほろと夜に崩れたり
繕ひの手仕事にもう役立たぬ切れ
なくなりしわが糸切り歯
明日かも知れぬ入院に待機する夢
捨てきれぬスーツケースは
最大のパーバリズムと言ひながら
夫は歌へり「乃木さんの尻取り歌」